

ウィズコロナ時代におけるオンラインによる「協働的な学び」とアクティブ・ラーニング ～ぎふ立志リーダー養成塾の試み～

田近岳裕¹⁾・山内あずさ¹⁾・古川由佳子¹⁾・山内茂樹²⁾
岩田睦巳³⁾・新井恒雄⁴⁾・水野光芳⁵⁾・益川浩一⁶⁾

¹⁾岐阜県環境生活部私学振興・青少年課（〒500-8570 岐阜市藪田南 2-1-1）

²⁾岐阜県岐阜市教育委員会学校指導課（〒500-8701 岐阜市司町 40-1）

³⁾岐阜県環境生活部環境生活政策課（〒500-8570 岐阜市藪田南 2-1-1）

⁴⁾岐阜県本巣市教育委員会学校教育課（〒501-0494 本巣市下真桑 1000 番地）

⁵⁾岐阜県立多治見北高等学校（〒507-0022 多治見市上山町 2-49）

⁶⁾岐阜大学地域協学センター（〒501-1193 岐阜市柳戸 1-1）

1. はじめに

中央教育審議会は、令和3年3月に、『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)』を纏めた¹⁾。ここでは、社会の在り方が劇的に変わる「Society5.0時代」の到来及び新型コロナウイルスの感染拡大など先行き不透明な「予測困難な時代」の中で、新学習指導要領の着実な実施とICTの活用を通して、「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識すると共に、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが必要」であるとされ、「個別最適な学び」と共に、「協働的な学び」の実現が必要であることが提言された。「協働的な学び」とは、「探究的な学習や体験活動などを通じ、子供同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する」学びであるとされている。

一方、新型コロナウイルス感染症対策に伴い、学校の長期臨時休業措置がとられる中、学びを保障する手段としての遠隔・オンライン教育が注目されると共に、教師による対面指導や、子供同士による学び合い、地域社会での多様な体験活動など、「リアルな体験」を通じて学ぶことの重要性が改めて注目されてきている。「協働的な学び」では、「集団の中で個が埋没してしまうことがないよう、『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善につなげ、子供一人一人のよい点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わせさり、よりよい学びを生み出していくようにすることが大切である。」とされ、「同じ空間で時間を共にすることで、お互いの感性や考え方等に触れ刺激し合うことの重要性について改めて認識する必要」があり、「人間同士のリアルな関係づくりは社会を形成していく上で不可欠であり、知・徳・体を一体的に育むためには、教師と子供の関わり合いや子供同士の関わり合い、自分の感覚や行為を通して理解する実習・実験、地域社会での体験活動、専門家との交流など、様々な場面でリアルな体験を通じて学ぶことの重要性が、AI技術が高度に発達する Society5.0 時代にこそ一層高まるものである。」と指摘されている。

このように、「協働的な学び」において、「リアルな体験」を通じた学びの重要性が一層高まると指摘される一方で、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、子どもたちの間でも、いわゆる「三密」を避け、「ソーシャル・ディスタンス」を保つことが必要とされる中で、「リアルな体験」を通じた「協働的な学び」を実現することが困難な状況が生起している。

本稿では、岐阜県内中学生が他の学校の中学生と共に学校の枠を超えて切磋琢磨し、ディスカッション・グループワーク等のアクティブ・ラーニングを繰り返しながら、地域（例年、岐阜県白川村をフィールドとしている）を知り、地域の課題を見つけ、地域の課題解決に向けた企画提案を行う「地域課題への企画提案」をコア・コンテンツとする「ぎふ立志リーダー養成塾」（主催：岐阜県）を事例とし、コロナ禍におけるオンライン（今回は、ビデオ会議アプリ Zoom を用いた）による「協働的な学び」/アクティブ・ラーニングの試みについて報告し、その意義と課題について考究するものである。

2. 「ぎふ立志リーダー養成塾」の概要

(1) 開催趣旨

経済のグローバル化、少子高齢化など多くの課題が山積し、先行き不透明な時代にあって、前進のために挑戦し新しい時代を創造する次世代のリーダーが求められている。感受性が豊かな青年前期にあり、また、学校においてリーダー的役割を担い、将来、各方面での活躍が期待される志の高い中学生に対し、優れたアドバイザーの指導のもと、同じ志をもった仲間と共に、「考え、チャレンジし、まとめあげ、発信する」共同作業を通して、「目的のために、責任ある決断をし、人をまとめ引っ張っていく力」を伸ばすプログラムを実施することにより、将来のリーダーを養成することを目的としている。

(2) 「ぎふ立志リーダー養成塾」プログラム内容

本事業は令和元年度まで、トヨタ白川郷自然学校（大野郡白川村）に全参加者が集合し、3泊4日の日程で、リーダーとして必要な資質や能力の育成に向け、下記のようなプログラムを実施してきた。

表1. 「ぎふ立志リーダー養成塾」プログラム内容一覧

プログラム	内容、講師、テーマ
グループワーク	チームビルディング活動、リーダーシップに関するグループ活動
講義	塾長、副塾長、トヨタ白川郷自然学校長、岐阜県副知事、岐阜県教育委員会義務教育総括監、(株)美ら地球代表取締役 等
体験活動	白川郷見学、森の手入れ作業、そばづくり、間伐材等を活用した創作活動
課題解決学習	岐阜県知事にチャレンジ、教育課題にチャレンジ、社会問題にチャレンジ
ディベート	格差社会問題、多文化共生問題、ごみ処理の有料化、中学生の携帯電話所有
地域課題への企画提案	白川村の活性化に向け、「担い手づくり・過疎対策・観光・産業」等を視点にした企画の提案

(年度により内容が異なる)

特に、平成30年度からスタートした「地域課題への企画提案」は、「白川村」を共通のテーマとし、「担い手づくり・過疎対策・観光・産業」等を視点にし、課題把握、企画立案、提案準備、提案発表という一連の学びをグループで協力して学ぶプログラムである。協力して、グループで1つの企画案を完成させる活動を通して、主体的かつ対話的な活動が充実し、充実感や満足感を味わうことや、新たな見方や考え方を身につけることができ、深い学びにつながった。このプログラムを通して、「目的のために、責任ある決断をし、人をまとめ引っ張っていく力」を伸ばし、将来のリーダーを養成するという本事業の趣旨の達成に大きく近づくことができた。

3. 令和3年度「ぎふ立志リーダー養成塾」の実施について

前述のように、多くの参加塾生たちのリーダーとしての力を伸ばし、送り出してきた「ぎふ立志リーダー養成塾」であるが、令和2年度は新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、開催の中止を余儀なくされた。

令和3年度の実施に向けては、様々な検討がなされ、将来のリーダーとして期待される中学生の学びを止めない、そのために開催方法を工夫したうえで実施していくという考えのもと、オンラインによる実施を決定した。

以下は、令和3年度の「ぎふ立志リーダー養成塾」の概要である。

- ・参加対象：岐阜県内の中学校において、生徒会長・副会長・生徒会役員・学級代表（議員を含む）として活動する2年生又は3年生（いずれも経験者を含む）
- ・開催期日：令和3年7月31日、8月1日、8月6日、8月7日（4日間）
- ・開催方法：オンライン開催（Zoomによる）
- ・塾長：鈴木 良春氏【（一社）岐阜県経済同友会筆頭代表幹事】
- ・副塾長：益川 浩一氏【岐阜大学地域協学センター長】
- ・協賛：（一社）岐阜県経済同友会、（一社）岐阜県経営者協会、岐阜県商工会議所連合会、岐阜県中小企業団体中央会、岐阜県商工会連合会

4. 令和3年度「ぎふ立志リーダー養成塾」のプログラム内容の検討に向けて

(1) オンライン実施に係る課題

プログラム内容の検討にあたり、令和元年度までの成果を踏まえ、オンラインであっても、「地域課題への企画提案」プログラムを活動のコア・コンテンツとして実施し、参加中学生に充実感や満足感をもたせたい。そこで身につけた力を中学校や地域での生活に活かし、リーダーシップを発揮し今後活躍することができるようにさせたいという方向を確認した。一方で、オンラインでの実施にあたって、次のような課題があげられた。

- ・自分で見ると、触れる、体を動かすといったリアルな体験ができる活動の実施が難しい。
- ・仲間と同じ空間を共有しながら協働（議論、話し合いを進め、深める）し、合意形成を図りながら、一つのものをつくりあげる活動の実施が難しい。

(2) 「地域課題への企画提案」プログラムのオンライン実施について

今回、「ぎふ立志リーダー養成塾」をオンラインで実施するにあたって、全体像を図1のようにまとめた。

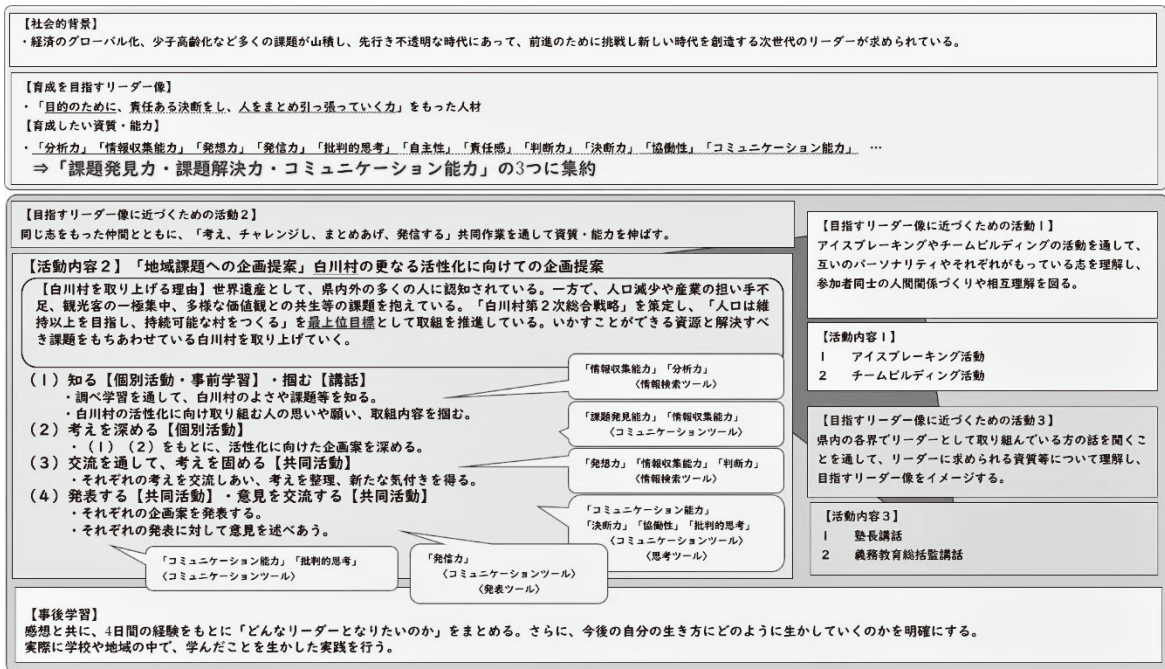


図1. 令和3年度「ぎふ立志リーダー養成塾」の全体像

特にコア・コンテンツに据えた「地域課題への企画提案」プログラムにおいて、オンライン実施に係るハードルを乗り越え、参加塾生の「目的のために、責任ある決断をし、人をまとめ引っ

張っていく力」を伸ばすために、工夫した点は以下の3点である。

- ①育成したい資質や能力の整理、明確化
- ②学び方の指導・学びの流れの工夫
- ③ファシリテーターによる議論の方向づけ

①育成したい資質や能力の整理、明確化

プログラム内容の具体的な検討に入る前に、オンラインという制限された環境の中で、活動を通して塾生のどのような力を育成することができれば、本塾の趣旨の達成と行うことができるのであろうかという検討を行った。そこで、オンライン実施における活動を通して、育成したいリーダーとしての資質や能力を整理し、明確にすることからスタートした。

リーダーに求められる資質や能力は、「情報収集能力」、「物事を多面的に見る力」、「問題の本質を捉える力」、「考えを相手が理解できるよう、分かりやすく伝える力」、「相手が伝えようとしていることを的確に掴む力」、「論理的に考える力」、「豊かな発想力」、「批判的思考」等、多岐にわたると考えられる。しかし、オンラインという限られた時間、空間の中で、そのすべてを一覧的に塾生に提示し、「このような力を伸ばすことができるように、頑張りましょう」と働きかけるだけでは、確実に育成することは難しい。

本事業の趣旨「目的のために、責任ある決断をし、人をまとめ引っ張っていく力を伸ばす」を具体的な活動と結びつけると、「目的」とは「課題を解決すること」であり、「責任ある決断」とは「状況や条件等に応じて、適切な方法を選び、実行すること」であり、「人をまとめ引っ張っていく」とは、「相手の考えを理解しながら、自分の考えを相手に主張しきること」であると捉えることができる。このことから、リーダーとして必要な資質や能力を次のように整理した。

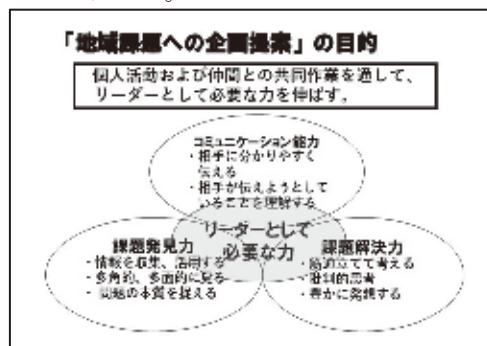


図2. リーダーとしての資質や能力

「課題を自ら見つけ、その解決に向けて、適切な方法や手段を自ら選択して取り組んだり、仲間と積極的にコミュニケーションを取りながら考えを深めたりすることができる力」

これを「課題発見力・課題解決力・コミュニケーション能力」という3つの力で塾生に提示し、常に意識して活動に取り組むことができるようにした。例えば、ワークシート（後述）の中にキーワードを位置付け、塾生がこの学習を通して、どんな力を伸ばすのかを意識しながら進めることができるよう工夫をした。あるいは、「ここで必要な○○力（3つの力）は、△△する力だね」と伝え続けることで、意識の継続を図った。

②学び方の指導・学びの流れの工夫

「地域課題への企画提案」プログラムのゴールとなる活動は、「企画提案発表会」である。令和元年度までは、塾生が集合し、各グループで頭をつきあわせて、個々のアイデアを出し合い議論し、合意形成を図りながら、1つの企画案を作り上げた。「企画提案発表会」では、協力して作成したプレゼンテーションを示しながらグループ発表を行った。しかし、前述のようにオンラインでの活動においては、仲間と同じ空間を共有しながら協働し、合意形成を図りながら、一つのものをつくりあげる活動の実施はハードルが高いと考えられた。

そこで、今回の「企画提案発表会」では、塾生一人一人が、白川村が抱える課題を解決し、さらなる活性化に向けた企画提案を責任をもって作り上げる。つまり、「個」を鍛えるという意識をより強くもって指導を行うという方向にシフトした。ここで、一人で企画案を作り上げるためには、学びの見通しをもたせること、どのような学び方をすればよいか理解させることが必要であると考えた。

②-1 「最上位目標を意識した学び」の指導

企画提案では、設定された4つのテーマの内の1テーマを切り口にし、それぞれのテーマに沿って、塾生が中学生らしい自由な発想で企画を提案する活動を行う。しかし、企画案が現実離れしすぎていたり、実現可能性があまりにも低かったりするものばかりを考えると、前述の資質や能力を伸ばすことにはつながらないと考えた。そこで、「白川村第2次総合戦略 いつまでも住み続けたい村づくりマスタープラン」において掲げられている、「人口は維持以上を目指し、持続可能な村をつくる」を最上位目標として、考えに行き詰った時や迷いが生じた時には、最上位目標に立ち返って考えてみること（バックキャスト思考）について指導した。

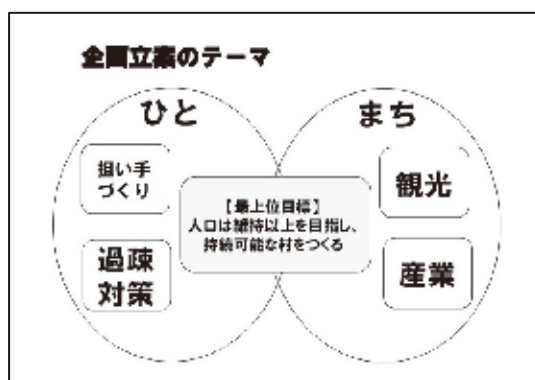


図3. 企画立案のテーマ

②-2 学びの流れの工夫

今回、「地域課題への企画提案」プログラムの学びの流れを図4のように考えた。「企画提案発表会」を活動のゴールとし、そこに至る4段階の学びの場を設定した。

この学びの流れを、4日間+αの日程の中に表2のように落とし込んだ。今回、これまでと大きく変更したのは、日程全体を前半と後半の2つに分けて設定したことである。

前半：「課題掘み～企画検討・立案」

後半：「企画交流～提案準備～企画提案発表会」

さらに、前半での学びを活かし、後半の活動に向かって、それぞれの考えを深めていくための時間を確保することが必要であると考え、前後半の間に中間個人学習の時間を設定した。

また、学びの流れについては、活動前に提示し、塾生が見通しをもって学ぶことができるようにした。

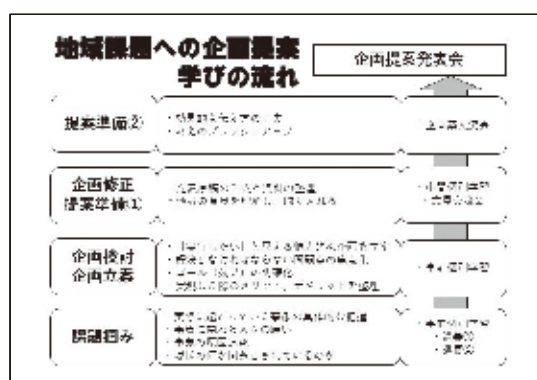


図4. 「企画提案」学びの流れ

表2. 「企画提案」プログラム日程

《プログラム前半》 事業開始前 7月31日、8月1日	【事前個人学習】テーマに沿った調べ学習 企画立案 【講義1】世界遺産を学ぶ 講師：地域ガイド 【講義2】地域リーダーに学ぶ 講師：白川村職員 【グループ活動1】白川村の財産、資源や課題の共有	オンライン
《中間個人学習》 8月2日～5日	【中間個人学習】企画案の見直し、修正 提案準備	
《プログラム後半》 8月6日、7日	【グループ活動2】企画案交流会 企画検討会 【グループ活動3】企画提案発表会	オンライン

《プログラム前半について》

プログラム前半は、事前個人学習、講義、グループ活動1の3つの活動で構成した。ここでは、課題発見力を発揮して、白川村の財産や資源などの魅力や抱えている課題を掘み、企画案を立案することを目的とした。

【事前個人学習】では、「テーマに関わる白川村の現状掘み→課題・問題の明確化→原因追究→課題解決に向けた企画立案」の一連の学びを行った。インターネットや本などの資料を活用し、必要な情報を取捨選択しながら収集し、「事実」と共に「問題の本質」を捉えた上で、企画立案ができるよう指導を行った。指導に際しては、意図的に学びの流れをつくるために、ワークシート



図5. 事前個人学習で用いたワークシート（活用例示）

講義では白川村に生きる人たちのリアルな声に触れることを大切に。特に2つの講義は、今回「リアルに触れる」数少ない機会であるため、「事実」を掴むことと同時に「そこに生きる人の願い」を掴むことをポイントとして聴くことについて特に指導した。事前学習において、資料を用いた学びを行っているが、思いや願いに触れることでこそ捉えられる「問題の本質」があると考えた。

【講義1】「世界遺産を学ぶ」では、従来行っていた、実際に村内を歩いて回り、自分の目で見ることや空気感を肌で感じるという学びができない。そこで、事前に担当者が講師の方と村内を実際に歩き、講義において塾生に対して、「何を伝えるべきか」を検討し、必要となる資料写真を撮影し、塾生が講義の内容をよりリアルに感じることができるよう努めた。

【講義2】「地域リーダーに学ぶ」では、白川村職員の方と事前の打ち合わせを重ね、数値等で表される白川村に関する「事実」はもちろん、白川村に生きる人々がその「事実」をどのように受け止め、どのような思いをもって取り組まれているのかという「白川村に生きる人の思いや願い」についても語っていただけるよう依頼をした。

【グループ活動1】では、同じテーマで企画案を考えている塾生同士で、講義を通して得た、新たな気づきを共有する時間とした。この時間を設け、自分の気づきを他の塾生に伝えるという能動的な活動を行うことで、塾生一人一人の得た新たな気づきをより明確、より確かなものにする事ができると考えた。



図6. 講義1「世界遺産を学ぶ」

《中間個人学習について》

中間個人学習では、プログラム前半で新たに掴んだ実態や課題を踏まえて、自分の企画案を見つめる、ブラッシュアップさせることを目的とした。また、中間個人学習は、発表のための準備をする貴重な時間であり、案を発表原稿の形にしたり、提示資料を作成したりする時間となった。また、塾生においては、発表の方法について、具体的なイメージをもつことができている様子が感じられたため、中間個人学習に入る前に、他の話題について発表を実際にやってみせることで、発表イメージを膨らますことができるようにした。

《プログラム後半について》

プログラム後半は、企画案交流会及び企画案提案発表会の2つの活動で構成した。ここでは、課題解決力やコミュニケーション力を発揮し、企画案の充実及び互いの企画案をよりよく伝え合うことを目的とした。

【グループ活動2】「企画案交流会」では、同じテーマで企画立案した塾生同士でグループを組み、それぞれの企画案の交流を行った。自分の考えや仲間の考えを磨き、充実させるために、課題解決力の一つである「批判的思考」を特に指導した。「なぜそうするのか」、「そもそもその考え方は最上位目標の達成につながるのか」と問い続けることを意識させた。

【グループ活動3】「企画提案発表会」では、異なるテーマで企画立案した塾生同士で新たなグループを組み、それぞれの企画案を発表した。塾生一人一人が、4日間+α（個人学習）の学びに充実感をもつことができるようにすることと共に、どのような資質や能力を身につけることができたのかを意識化できるように、互いの発表を次のような視点をもって聞き、よさを伝え合うことで、互いの頑張りや高まりを評価しあうことができるようにした。

自分の考えを磨くために！ 互いの案を磨きあうために！

批判的思考

「批判」という言葉は反対する、受け入れない、場合によっては、攻撃する等、ネガティブなイメージをもつ人が多いかもしれませんが、しかし、「批判」とは、もともと「情報を分析、吟味して取り入れること」を表しています。

「なぜ？」と問い続けることで、本質（最上位目標達成）に近づく「そもそも、これは正しいのか」と問い、様々なアプローチを切り出す

図7. 「批判的思考」の指導

①企画内容のよさ

- ・企画は、最上位目標の実現に近づくものか
- ・課題を踏まえたゴール設定（課題からゴールに向けての一貫性）
- ・目のつけ所、発想の豊かさ、ユニークさ（興味をひくものだったか、これまでにない視点）
- ・実現可能性（本当に実現が可能なものであったか）

②プレゼン方法のよさ

- ・聞き手を惹きつける話し方（表情、強弱、スピード、間 など）
- ・理解しやすいプレゼンの組立（順序だて、具体例 等）
- ・資料の活用（説得力があったか、目を惹くものだったか など）

③ ファシリテーターによる議論の方向づけ

オンライン実施にあたっての一番の心配事は、「画面を通した意見のやり取りを通して、どこまで議論を深めることができるか」という点であった。それぞれの考えを順番に話し、一通り話したら終わりとなり、議論が深まっていかないのではないかと懸念があった。今回、塾生一人一人が企画案をつくり、発表するというゴールを設定したが、それぞれの案をより充実したものにしていくためには、塾生同士で一つ一つの案について議論しあうことが不可欠であると考えた。しかし、塾生だけでは自分の企画案を作り上げることばかりに意識が向き、互いの企画案を充実させるために議論することが難しいのではないかと思われた。そこで、議論をリードし、深まりを生み出す役割を担う存在、活動を通して身につけさせたい資質や能力に導いていく存在が必要であると考えた。

そこで、各グループにファシリテーターを置き、塾生と共に活動を行っていくこととした。ファシリテーターは、現職の教員をはじめ、教職経験のある方に依頼し、本事業の趣旨やプログラム内容等を理解していただいた上で、各グループに1人ずつついて、塾生と共に活動をしていただいた。具体的には、次のような役割を担っていただくよう依頼した。

- ・意見や考えについて、不明確であったり具体的でなかったりする点があった時に、立ち止まることで、参加者が新たな気づきを得たり、共有したりするきっかけづくりをする。
- ・参加者の見方や考え方のよさを評価し、一人一人が企画案の充実や改善の方向を見出すきっかけづくりをする。
- ・参加者の資質や能力を発揮して取り組んでいる姿を取り上げ、評価し、広げていく。

5. 塾生の学びの様子

「地域課題への企画提案」プログラムのゴールである「企画提案発表会」において、塾生はそれぞれが時間をかけて作り上げた企画を発表した。発表会には参加塾生の所属中学校の教職員の方にも参加いただき、感想や講評をいただいた。表3は、企画案の一部である。

表3. 「地域課題への企画提案」内容

テーマ	企画名	内容
担い手づくり	・心を結ぶYouTubeプロジェクト	子どもたちが主体的に動き、子どもたちだけで村をPRする動画を撮影し、SNSを活用して発信する。動画撮影を通して、村の大人たちと関わり様々な体験を通して、子どもたち自身も村の魅力を発見し、村に貢献したいと思う素地を作る。
過疎対策	・施設・仕事を増やそうプロジェクト	最上位目標「人口維持以上：1500人以上に維持する」を達成するために「子育てしやすい・過ごしやすい・仕事しやすい」をポイントにし、施設の充実、仕事場所の確保を進めていく。
観光	・SHIRAKAWA nderランド～何時間も・何度も楽しむ、白川観光の新しい形～	「子ども連れ」の家族をターゲットにし、3つの「つくる」を柱にして、持続可能な観光づくりをしていく。 ・「泊まろう」と思える仕組を『つくる』 ・魅力ある観光地を、+αで『つくる』 ・名物（オンリーワン）を『つくる』
産業	・Work Happily Project	白川村を自分の「夢を叶えられる場所」にするために、誰もが楽しくやりたい仕事ができる環境をつくる。 ・白川村で農業ができる環境 ・リモートワークを村でできるようにする環境 ・新事業を立ち上げる人の支援の環境 特に若者が働きやすい環境を作ること、様々な産業を活性化させ、最上位目標を達成する。

どの企画案も、中学生の目線で、白川村の現状をしっかりと捉え、柔軟な発想から生まれたものとなった。また、目の前にある課題の解決のみを目指すのではなく、最上位目標の達成を強く意識していることが感じられた。実際に発表の中には、「最上位目標を達成するために」という発言が多くあった。資質や能力を育成するために、活動全体を通して大切に、繰り返し働きかけることで、常に意識して学ぶ姿につながったと感じた。

また、オンラインという環境において、企画案の内容を相手に効果的に伝えるための手段を工夫することも必要であったが、塾生はプレゼンテーションソフトの活用、色画用紙の活用（キーワード提示、イラスト提示、紙芝居、図式化）など、様々な手段を用いて企画案を伝える姿が多く見られた。プレゼンテーションソフトの活用ありきではなく、より効果的に伝える手段について自由に考え、適切な手段を選び取らせることが、柔軟な発想力の発揮に結びついたと感じた。



図8. 「企画提案発表会」の様子

以下は、塾生の参加後の感想である。

- ・何か足りない、何が悪いと課題点ばかりを考えるのではなく、今ある良さを伸ばして理想の姿に近づけられる目標を立てることの大切さを学びました。また、目標を考える際には、一般的、表層的なものではなく、数値などの具体的な根拠をもとにした、深く掘り下げた目標を立てることが大切だと学びました。
- ・仲間との意見交流の場で、「判断力」を身につけることができました。自分の意見、考えに対して、仲間からは「もっとこうしたほうがいいよ。」「ここをもっと調べた方がわかりやすいよ。」などのたくさんの意見をもらい、どの意見をどのように使い、どのように発表するかと、自分の中で判断してやらなければなりませんでした。
- ・「プレゼンテーション力」は、4日目のプレゼンテーションに向けてのスピーチ原稿の準備や練習、また発表の当日、すべてを通して身につけられたと思います。プレゼンテーションというのは、ただ単に話し手が一方的に話しているだけでは成り立ちません。聞き手が興味をそそられるような工夫をしなければなりません。そこで私は、資料を工夫し、紙芝居方式で発表することにしました。原稿についても、まず結論を先に述べ、続いて根拠の説明をするという構成の工夫をしました。発表のための準備の時間も、自分を成長させてくれたと実感しています。

どの感想からも、「課題発見力・課題解決力・コミュニケーション能力」を意識しながら学びを進め、最終的に「自分はこのような力を伸ばすことができた」という実感をもって活動を終えることができたことが感じ取られる。

6. 成果と課題

「ぎふ立志リーダー養成塾」のオンライン実施に関わる成果と課題を、育成したい資質や能力の視点から、塾生と活動を共にしたファシリテーターは次のように活動を振り返った。

<課題発見力>

- ・参加塾生は、事前に配付された資料や個で調べた内容から、白川村が抱える問題を的確に捉えることができていた。また、白川村職員の方の話を通して、そうした問題をより切実に感じることができた。さらには、グループの仲間との交流を通して、新たな課題を見出す姿もあった。こうした姿から、今回の活動内容は適切だったと言える。
- ・一人一人の課題発見力・課題解決力を伸ばすことを目的にする上で、今回の活動形態は適切であったと考える。「だれか」に頼ることなく、自己解決する力を塾生一人一人が伸ばすことができたと感じた。

<課題解決力>

- ・参加塾生は、自分が見つけた課題に対し、様々な資料を探し取捨選択しながら解決策を考えることができた。交流時の発表からは、一人一人の独自性も見られ、課題解決に向けて、しっかり取り組んでいたことが伝わってきた。二日目と三日目の間に十分な時間があつたことや必要以上に仲間との交流がなく、一人で考える状況をつくったことの成果であると考えられる。
- ・オンラインでの開催により、協働の部分が弱くなるのは致し方ないと感じた。個別の提案となることから、同じテーマでありながらも、仲間の提案に対する意見等は薄いものとなってしまった。課題は共有化できたものの、よりよいものをみんなで作り上げるという意識に立つことは難しかったと感じる。ただ、そのような意識をもって取り組んだ参加者もあり、意図的に質問やアイデアを出し、自分の考えや提案を深めることができた参加者もいた。
- ・個人で企画という点で、発表の際に個々の能力差が顕著にでたと感じた。特に、まとめる力や企画交流において仲間から貰った意見を自分の案に反映させ、改善する力という点において感じた。

<コミュニケーション能力>

- ・今回の形でコミュニケーション能力を伸ばすことは難しいと感じた。オンライン上で子どもたちは、感想や意見を言っていたが、今まで培ってきた力によるところが大きいと感じた。相手の仕草、目、語り方等を見ながら、相手の思い（考え）を感じ取ったり、タイミングをみて自分の考えを語ったりするなど、双方向のやりとりが際限なく繰り返されることで、コミュニケーション能力は鍛えられる。オンライン上で、これらのことを行うことができるような指導について検討の余地がある。
- ・コミュニケーション能力（表現力）については、個によって差があり、オンラインを通じた発表の仕方について今年度の事例をもとに、事前指導を行うことが必要である。
- ・コミュニケーション能力を伸ばすという点について、最終日の前日の企画交流会において、ファシリテーターを子どもに輪番でやらせてもらってもよかったかと感じている。受け手と回し手の立場を体験する機会を意図的につくるのが、コミュニケーション能力を伸ばすことにつながるのではないかと。

参加塾生の取組の様子や事後の感想及びファシリテーターの振り返りから考えられる「ぎふ立志リーダー養成塾」のオンライン実施に係る成果と課題は以下のようである。

(1) 成果

- ・「リアルに触れる」という点については、写真だけでは白川村の空気感まで感じることは難しい面があった。しかし、画面を通してであるが、白川村に生きる人たちに会い、それぞれの白川村に対する思いや願いを聞くことができた。「白川村に生きる人たちのリアル」を塾生たちは感じる事ができた。オンラインであっても、「人に会う」ことが学びを深めるために重要であると確かめることができた。
- ・「最上位目標」の意識化を図ることや学びの見通しをもたせることは、学びの方向や向かっていくゴールを明確にもって学ぶことにつながり、自分で企画案を作り上げていく際の拠り所となり、有効であった。
- ・「リーダーに必要な資質や能力」を「課題発見力・課題解決力・コミュニケーション能力」の3つの力をキーワード化して塾生に提示し、事前学習から企画提案発表会まで、常に意識させることで、塾生自身が「今やっている活動がどんな力を伸ばすことにつながっているのか」、「自分がどんな資質や能力を伸ばすことができたのか」と自覚することにつながった。

(2) 課題

- ・グループ討議において、ファシリテーターが塾生に対して、疑問を投げかけたり、それぞれの考えをつなげたり等の関わりや働きかけを行うことで、議論の深まりを作ることができた場面があった。その一方で、塾生が議論を深める関わりを主体的に行う機会を奪ってしまうことになってしまう面もあった。積極的な働きかけで塾生を引っ張る場面、塾生に任せて、一歩引いた立場で塾生を見守る場面など、ファシリテーターが出る場面や出方について検討していく余地がある。
- ・どの塾生にも、「協働」の意識を強くもたせることの手立てについて検討していく必要がある。その手立てを講ずることが、「課題解決力」や「コミュニケーション力」を伸ばすことによりつながると考える。

7. おわりに

コロナ禍により、令和2年度の「ぎふ立志リーダー養成塾」は中止を余儀なくされた。しかし、この状況下にあっても、子どもたちの学びの機会をつくっていききたいとの強い思いで、オンラインでの実施に踏み切った。

参加にあたって、多くの塾生が「パソコンの画面を通して、どこまで仲良くなれるのだろうか」という不安を口にしていた。しかし、閉塾時には「この仲間たちともっと一緒に学びたい」との

思いをもつ塾生がほとんどであった。オンラインでの学びにおいても、「仲間と共に学ぶことのよさ」を実感することができたということであろうと感じる。一方で、「実際に顔をあわせて、一緒に活動することができたら、より充実した学びができ、より良いものをつくりあげることができそうだ」という思いも残ったようである。

今回の実践を通して、オンラインでの学びにおいても、資質や能力を一定程度伸ばすことができることが明らかになった。今後は、集合型での学びでこそ伸ばすことができる資質や能力、オンラインでの学びで伸ばすことができる資質や能力を整理し、状況に応じて、多様な学びを組み合わせることで、学びの機会を提供していくことが重要であると考えられる。

注)

- 1) 以下、『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』に基づいて記述している。